

各位

「稲作・大豆情報（第7号）」について（送付）

1. 氣象概況

○7月6半旬の平均気温は、平年に比べて2℃ほど高く推移した。降水はなく、日照時間は平年比183%と多い。

○農業試験研究センター米づくり情報5号 7月30日(抜粋)

移植日	項目 品種	年次	草丈 cm	茎数 本／㎡	葉 齢 L	葉色 SPAD	概 況 (平年または平均との比較)
6月18日	夢しずく	本 年	71.6	360	11.5	39.0	【気象】 7月23日～29日まで ◆平均気温…3.0℃高い ◆日照時間…長い(平年比 163%) ◆降水量…少ない(平年比 0%) 【生育】 ◆草丈 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」はやや低く、「ヒヨクモチ」は高い。 ◆茎数 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」、「さがびより」は少なく、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」は多い。 ◆葉齢 「ひなたまる」はやや少なく、「夢しずく」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」は平年並み、「ヒノヒカリ」はやや多い。
		平 年	72.9	412	11.5	39.2	
		平年比(差)	98	87	(±0)	(-0.2)	
	ヒノヒカリ	本 年	63.6	499	12.0	39.5	◆葉色(SPAD 値) 「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」はやや淡く、「夢しずく」、「ヒノヒカリ」は平年並み、「さがびより」はやや濃い。
		平 年	66.6	544	11.5	40.1	
		平年比(差)	95	92	(+0.5)	(-0.6)	
6月19日	ひなたまる	本 年	64.2	504	11.7	41.4	
		平均(2か年)	66.2	394	12.1	42.1	
		平均比(差)	97	128	(-0.4)	(-0.7)	
	さがびより	本 年	62.5	470	11.7	40.6	
		平 年	63.9	539	11.6	40.0	
		平年比(差)	98	87	(+0.1)	(+0.6)	
ヒヨクモチ	本 年	64.1	901	12.2	39.0		
	平 年	58.7	826	12.1	40.8		
	平年比(差)	109	109	(+0.1)	(-1.8)		
留意点	○「夢しずく」は幼穂形成期を迎えているため、中干しは終了し、穂肥診断に基づき遅れないように穂肥を施用する。 ○「ひなたまる」「さがびより」「ヒヨクモチ」等の中晩生品種は、幼穂形成始期までには中干しを終了し、穂肥診断に基づき穂肥を施用する。その後は間断灌水に切り替える。 ○病害虫発生予察情報予報第4号(8月の予報)で、普通期水稻では、紋枯病“やや多”、トビイロウンカ“やや多”、コブノメイガ“多”、斑点米カメムシ類“多”となっており、病害虫の発生状況に注意する。 農業技術防除センターの情報を参考にするともに、圃場の観察により防除を的確に行う。 ●病害虫に関する情報は以下のリンク(農業技術防除センター病害虫防除部)より確認ください。 https://www.pref.saga.lg.jp/kij00321899/index.html						

注 1)「夢しずく」、「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」は、6 月 18 日移植の稚苗(播種期 5/25、播種量 湿粳 180g/箱)

「さがびより」、「ヒヨクモチ」は、6 月 19 日移植の稚苗(播種期 5/26 播種量 湿粳 180g/箱)

2)栽植密度:「夢しずく」は、条間 30 cm×株間 17 cm、19.6 株/m²(65 株/坪)

「ひなたまる」は、条間 30 cm×株間 18 cm、18.5 株/m²(60 株/坪)

「さがびより」は、条間 30 cm×株間 20 cm、16.7 株/m²(55 株/坪)

「ヒノヒカリ」「ヒヨクモチ」は、条間 30 cm×株間 15 cm、22.2 株/m²(73 株/坪)

3)栽培管理:施肥法は県基準に準じ、防除他はセンターの慣行による。

2. 管内の生育状況(8月5日時点)

1) 普通期水稻 : 最高分げつ期～穂ばらみ期である。

日照時間が長く、高温で推移した。巡回時は、全体的に葉色が濃い圃場が多いため、穂肥診断を行い、穂肥の有無の確認を推奨する。

3. 今後の管理

1) 普通期水稻

- ・移植後、気温が高く推移したことで雑草の生育が早く、除草剤の効果が十分発揮できていない圃場も確認されている。その場合、中後期除草剤の散布も視野にいれる。使用の際は、高温条件が続いているので、葉害を助長しないため、温度が下がった夕方に散布を行う事。(収穫前日数に留意して使用する)
- ・中干しは、異常高温が続いているので、期間を短めにし、白乾状態にならないように気を付ける(軽くひび割れが入り足跡が残る程度とする)。茎数が少ない圃場では中干しは軽めにとどめる。中干しが終了した圃場では間断灌水を実施する。

① 夢しずく

- ・幼穂形成期から出穂期にかけては要水量が増加する時期であるため、湛水(浅水)管理とする。

② ヒノヒカリ

○「ヒノヒカリ」は、幼穂形成始期を迎え、穂肥施用をする時期である。

下記の診断基準により穂肥診断を必ず行い、適期適量の施用につなげる。

全量一発肥料を使っている場合でも、葉色がさめている際は、穂肥を行う。

【ヒノヒカリの穂肥診断基準】

草丈 cm 幼穂形成始期時	葉 色		穂肥施用時期			
		群 落	SPAD	出穂前	幼穂長	穂肥施用量 (N 成分)
80 cm 以下	淡い	3.0 以下	34 以下	20～22 日	1～2mm	3.0kg/10a
	標準	3.0～3.5	34～38	18～20 日	3～5mm	3.0kg/10a
	濃い	3.5～3.8	38～39	16 日	5～15mm	2.5kg/10a
	濃い	3.8 以上	40 以上	15 日	15～30mm	1.0kg/10a
80 cm 以上	淡い	3.0 以下	34 以下	20～22 日	1～2mm	2.5kg/10a
	標準	3.0～3.5	34～38	18～20 日	3～5mm	2.5kg/10a
	濃い	3.5 以上	38 以上	穂肥は施用しない		

③ 「ひなたまる」

- ・「ひなたまる」は、幼穂形成始期を迎え、穂肥施用をする時期である。
- ・施用時期が遅れないように次の穂肥施用のポイント(草丈・幼穂長)に基づき、穂肥を施用する。全量一発肥料を使っている場合でも、葉色がさめている際は、穂肥を行う。

【ひなたまるの穂肥診断基準】

草丈	葉色 (SPAD 値)	穂肥施用量 (N 成分:kg/10a)
77cm 未満	42 未満	3.0kg/10a
	42 以上	1.5kg/10a
77cm 以上	42 未満	3.0kg/10a
	42 以上	施用しない

※草丈・葉色は幼穂長が1mmの時の値。

※穂肥は幼穂が5mmの時に施用する。

④ さがびより

○「さがびより」は、8月10日頃から幼穂形成期を迎える見込み。

幼穂長5mm以上になったことを確認してから、下表の診断基準により穂肥を施用する。

全量一発肥料を使っている場合でも、葉色がさめている際は、穂肥を行う。

幼穂形成始期（幼穂長1mmの時）に穂肥診断する。

【さがびよりの穂肥診断基準】

	幼穂形成始期の 草丈cm	葉 色		施用時期の 幼穂長	出穂前 日数	施用量 N成分kg／10a
		群 落	SPAD			
穂肥診断時	7 5 cm 以下 （ 標 準 ）	2.5以下	33以下	5ミリ	20～18日	2.5kg
		3.0	33-37	10ミリ	18日	2.0kg
		3.5	37-38	15ミリ	16日	1.0kg
		3.8以上	39以上	施用しない		
	7 5 cm ～ 8 0 cm	3.0以下	36以下	10ミリ～15ミリ	18～16日	1.5kg
		3.0以上	37以上	施用しない		
	8 0 cm 以上	施用しない				

2) 病害虫の発生状況

①紋枯病

- ・8月の発生量は、平年よりやや多い予想である。
- ・発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展（垂直進展）する時期に防除を徹底する。
(液剤、粉剤の場合は出穂10～20日前を目安とする)
- ・病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。
- ・特に「ひなたまる」は紋枯病に弱いので、適期防除を徹底する。

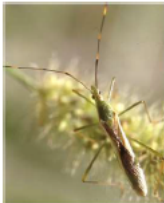
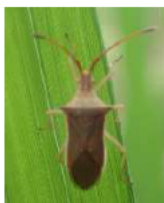
②斑点米カメムシ類

- ・8月の発生量は、平年よりやや多い予想である。
- ・出穂後の除草は、水田に斑点米カメムシ類を誘い込み被害に繋がるため、出穂10日前までに畦畔除草を行う。
- ・山麓部や河川敷付近など、例年発生の多い圃場では田廻りを励行し、防除を徹底する。
- ・防除はカメムシが穂に上ってくる夕方に行うと効果が高い。

③ウンカ類

- ・6月3日～6日頃、6月17日～20日頃、6月26日～27日頃、7月1日～2日頃、7月4日～6日頃、7月16日～20日頃に飛来を確認している。まとまった飛来量が多い6月26日以降を重点的に防除する。
- ・コブノメイガは6月20日頃からまとまった飛来が確認されている。飛来量は下表のとおり。
- ・発生予測は随時更新されるため、最新情報は佐賀県農業技術防除センターのホームページを参照。
- ・今後の飛来状況や圃場での発生状況（移植時期や品種、箱施用剤の種類、施用の有無、圃場の場所等）によってウンカ類の発生量や増殖率が異なるため、圃場での発生状況に注意する。

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稲 (早期)	紋枯病	並	  イネハカメムシ ホリハカメムシ
	斑点米カメムシ類	多	
水稲 (山間早植え)	穂いもち	やや少	
	紋枯病	やや多	
	トビイロウンカ	やや多	
	コブノメイガ	やや多	
	斑点米カメムシ類	多	
水稲 (普通期)	穂いもち	やや少	  トビイロウンカ コブノメイガ
	紋枯病	やや多	
	白葉枯病	並	
	もみ枯細菌病	並	
	トビイロウンカ	やや多	
	コブノメイガ	多	
	フタオビコヤガ	並	
	斑点米カメムシ類	多	
	1. 斑点米カメムシ類 水稲の出穂 10 日前までに圃場内及び圃場周辺の除草を行う。本年は多発生が予想されるため、穂揃い期と乳熟期（穂揃い期の約 10 日後）に薬剤防除を行う。イネカメムシは水稲の出穂初めから籾を吸汁して不稔及び基部斑点米を生じさせるため、出穂前にイネカメムシの発生を認めた圃場では、発生状況に応じて出穂期も防除を行う。 （令和 8 年 7 月 29 日付け病害虫発生予察注意報第 4 号参照）		
2. 紋枯病 近年、多発傾向にあるため、各圃場における発生状況を確認し、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展する時期（液剤、粉剤の場合は出穂 20～10 日前を目安とする）に防除を徹底する。			
水稲全般	1. トビイロウンカ 本年は飛来が断続的に認められ、飛来量も多いため、今後の発生に十分注意する。発生状況は、田植え時期、水稲の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図（共通-図 1）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、幼虫ふ化揃い期の防除を実施する。		
	2. コブノメイガ 地域によっては、幼虫の食害が多いため、今後の発生に注意する。止葉を含む上位 3 葉への被害を防止するため、発生予測図（共通-図 2）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで幼虫ふ化揃い期（発蛾最盛期の 7 日後）に防除を実施する		

《 海外飛来性害虫（トビイロウンカ・セジロウンカ）捕獲状況》 佐賀県農業技術防除センターHP 参照

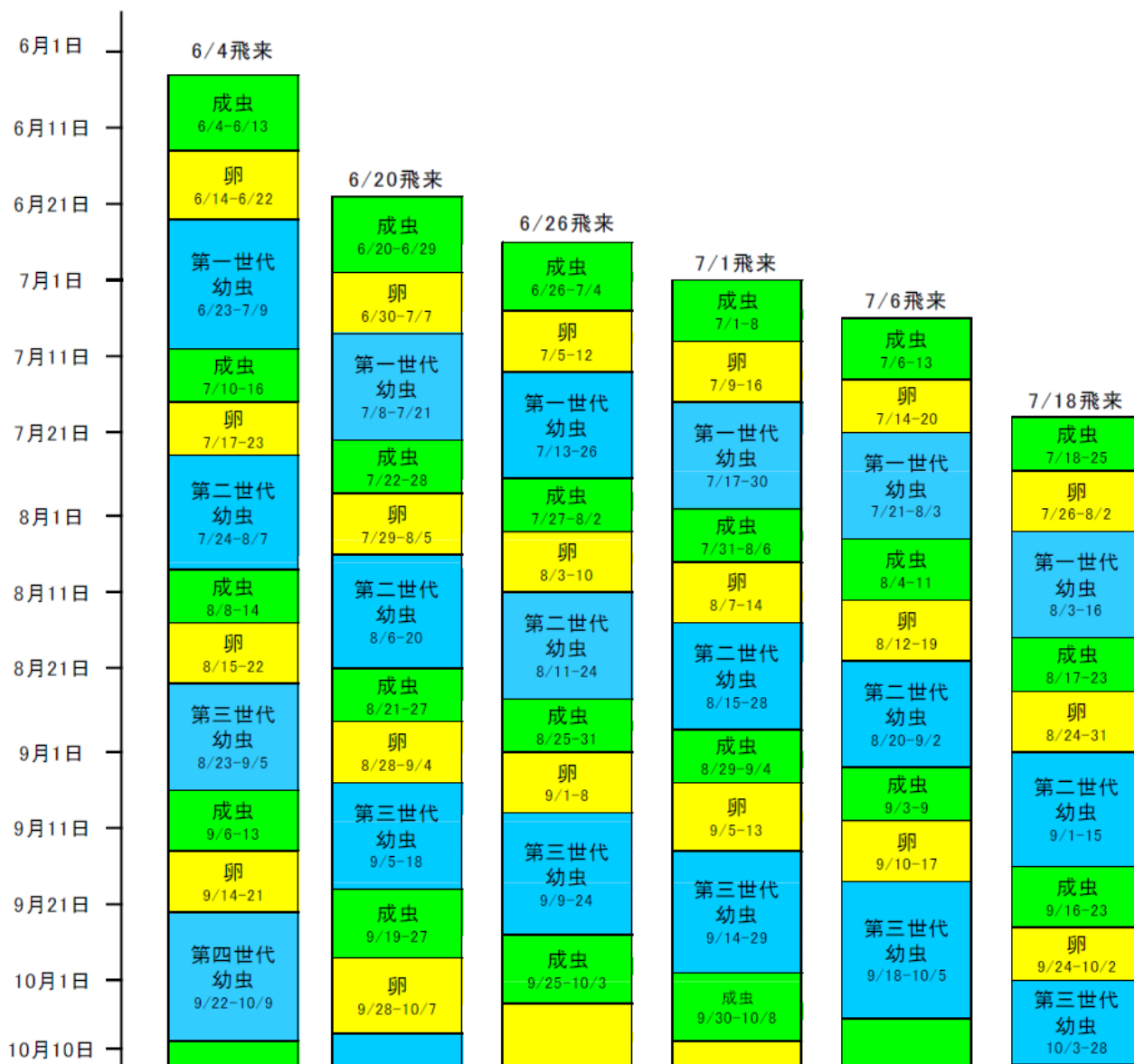
共通－表1 イネウンカ類・コブノメイガのトラップ捕獲状況(2026年)

月	日	トビイロウンカ				セジロウンカ				コブノメイガ						
		佐賀県		長崎県		佐賀県		長崎県		佐賀県						長崎県
		佐賀市 ネット トラップ	嬉野市 ライト トラップ	諫早市 ライト トラップ	諫早市 ネット トラップ	佐賀市 ネット トラップ	嬉野市 ライト トラップ	諫早市 ライト トラップ	諫早市 ネット トラップ	佐賀市 フェロモン トラップA	佐賀市 フェロモン トラップB	神埼市 粘着トラ ップ(20W蛍 光管)	伊万里市 フェロモン トラップ	白石町 フェロモン トラップ	武雄市 粘着トラ ップ(20W蛍 光管)	諫早市 フェロモン トラップ
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0	0
	2日	0	欠測	0	0	0	欠測	0	0	0		0			0	0
	3日	欠測	1	0	0	欠測	0	0	0	0					0	0
	4日	0	0	0	0	0	17	0	1	0					0	0
	5日	0	0	0	0	0	0	0	1	0					1	0
	6日	0	1	0	0	0	1	1	0	0		0			0	0
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0	0
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0	0
	9日	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0			0	0
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0	0					1	0
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0	0
	12日	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0			1	0
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0	0
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	0					1	0
	15日	0	0	0	0	0	1	0	0	0					0	0
	16日	0	0	0	0	0	1	0	0	0		0			0	0
	17日	0	1	0	0	0	1	0	0	0					0	0
	18日	0	4	0	0	0	4	0	0	0					0	0
	19日	0	0	0	0	0	1	0	1	0		0			5	6
	20日	0	8	0	0	0	4	0	0	0					44	8
	21日	0	0	0	0	0	0	0	1	0					0	12
	22日	0	0	0	0	0	1	0	0	0		0	2		22	6
	23日	0	0	0	0	0	2	0	0	0					0	11
	24日	0	0	0	0	0	29	4	0	0					1	0
	25日	0	0	0	0	0	47	0	0	0					0	1
	26日	0	1	0	0	0	106	4	0	0		0	1	0	10	0
	27日	0	1	0	0	0	11	0	0	0					1	0
	28日	0	0	0	0	0	4	0	1	0					0	0
	29日	0	0	0	0	0	1	0	0	0		0	3	0	1	0
	30日	0	0	0	0	0	3	0	0	0		0			0	0
7月	1日	0	12	0	0	0	7	1	2	0	0				0	0
	2日	0	11	0	0	0	7	5	0	0	0		4	0	4	0
	3日	0	2	0	0	0	8	0	0	0	0	0			0	0
	4日	0	22	0	0	0	46	2	0	0	0				0	0
	5日	1	3	0	0	2	32	0	0	0	0				0	0
	6日	0	99	0	0	2	111	0	0	0	0				0	0
	7日	0	25	0	0	0	32	0	1	0	0	0	0	0	4	0
	8日	0	3	0	0	1	5	0	0	1	0				0	0
	9日	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0				0	0
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0
	12日	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0				0	0
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2				0	0
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	1	3	0
	15日	0	1	0	0	0	11	0	0	0	0				0	0
	16日	0	7	0		0	31	0		0	0				0	0
	17日	0	9			0	67			0	1				0	0
	18日	0	9			1	48			0	0	0	0	8	1	0
	19日	0	5			1	37			0	0					
	20日	0	5			0	6			0	0					

注1)ウンカ類:佐賀市のネットトラップは、農業試験研究センターで調査(回収日で集計)。嬉野ライトトラップ(予察灯)は農業技術防除センターで調査。6月1～2日の嬉野ライトトラップは、装置の不具合により欠測。

注2)コブノメイガ:神埼市、白石町、伊万里市、武雄市は防除員が調査。佐賀市のフェロモントラップは農業試験研究センターで調査。
※長崎県のデータは、長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室提供。

トビイロウンカ発生予測（農業技術防除センターより）



トビイロウンカ各世代の発生予測（第2版、2026年7月26日作成）

1. 6月3～6日頃（図では6月4日）、6月17～20日頃（図では6月20日）、6月26～27日頃（図では6月26日）、7月1～2日頃（図では7月1日）、7月4～6日頃（図では7月6日）、及び7月16～20日頃（図では7月18日）の飛来虫を起点とし、トビイロウンカの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（7月26日以降は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 12℃、発育上限温度 28℃、発育停止温度 33℃とした。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

コブノメイガ発生予測（農業技術防除センターより）



コブノメイガ各世代の発生予測（第2版、2026年7月26日作成）

3) 台風対策

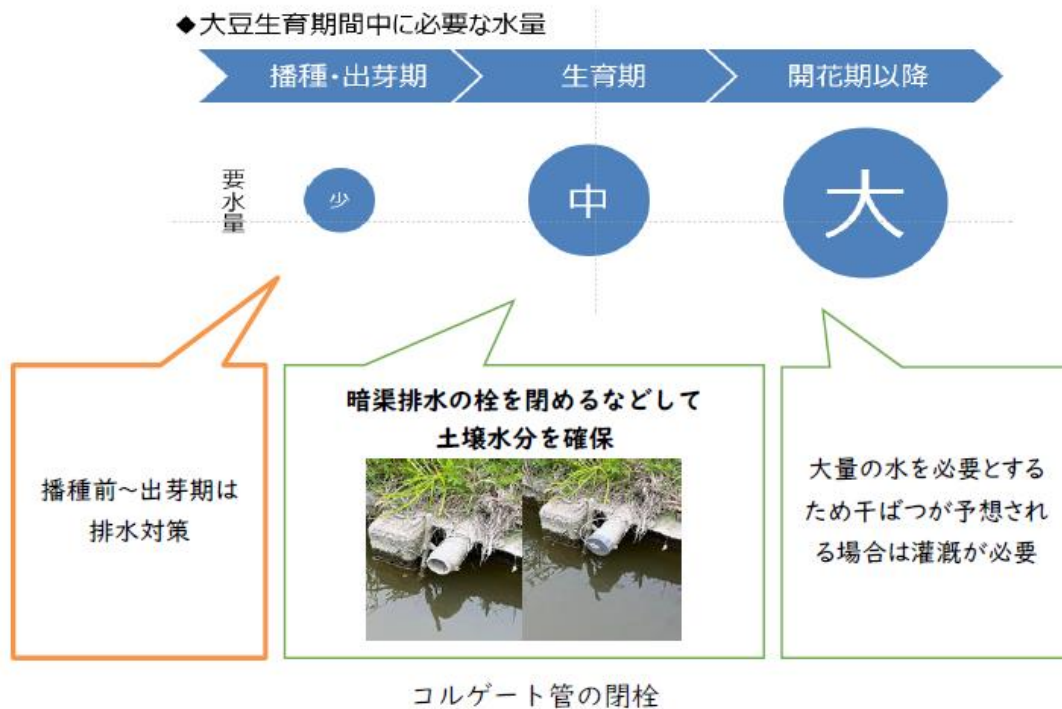
- ・茎葉の繁茂度が高く水分の蒸散量が著しい時期であるので、必ず深水・湛水を行い水収支バランスの維持につとめる。
- ・台風通過後は、新しい水と入れ換えた後、間断灌水により生育の回復を早める。
- ・茎葉の損傷が大きいと、白葉枯病が発生し易いので薬剤防除を実施する。

4. 今後の大豆の管理について

○大豆は7月3半旬ごろに、播種のピークを迎えた。梅雨明け以降、ほとんど降雨がないため、4半旬の播種となった圃場では、出芽ムラが散見される。

(1) 干ばつ対策について

○コルゲート管の閉栓が土壤水分確保に有効であるので、コルゲート管は閉め、土壤水分を確保する。



(2) 中耕・培土

①中耕・培土には様々な効果があり、積極的に収量を上げるための重要な作業である。

中耕・培土の主な効果

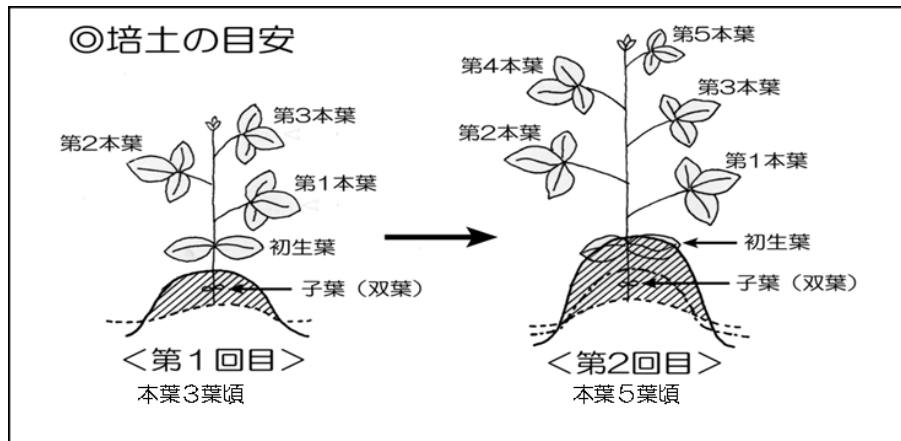
- 培土部分からの不定根の発生を促進し、養水分の吸収をよくする。
- 株元に土を寄せて、倒伏を防止する
- 土壌を膨軟にし、通気性を改善する
- 土壌を攪拌し、雑草の発生を抑える
(雑草を防除する)
- 畦が作られ、排水性が向上する
(表面排水を促進し湿害を受けにくくする)

- 1回目(本葉2～3葉期)…生育初期の雑草防除、土壌中への酸素供給。
- 2回目(本葉4～5葉期)…除草効果＋土壌通気性向上
＋新根発生促進 ＋倒伏防止。

※ 培土は開花1週間前までに終了すること！

- ② 株本まで土がしっかりかかるように行う事(不定根が発生し、根粒菌が活性化。生育が良くなる)
- ③ 開花後の中耕は断根による悪影響が大きくなるので開花前に終わる。
- ④ 乾燥が続く場合には乾燥を助長するため行わない。(カルチをかけた際、土埃がでるような条件では実施しない)

※梅雨明け以降ほとんど降雨がなく、干ばつが続いているため、中耕・培土は圃場の状態を確認し、作業を行うこと。



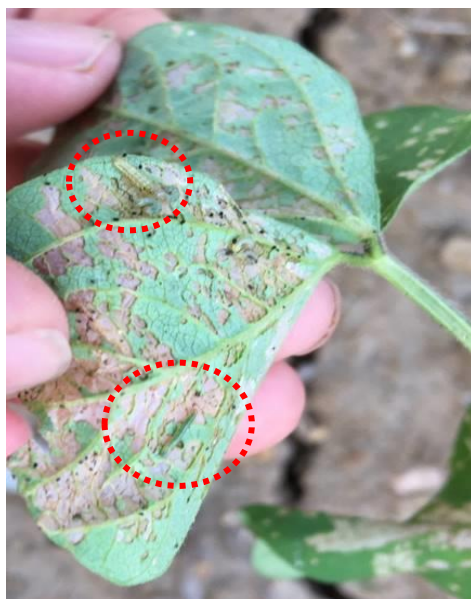
(3) 雑草対策

- ・出芽後の雑草対策としては、生育期除草剤となるので開花時期までに下記の除草剤で対策を行う。近年難防除雑草といわれる「アサガオ類」や「ホオズキ類」の発生が目立ってきている。以下に留意して適期防除につなげる。
- ① アサガオ類やホオズキ類等の難防除雑草は、圃場内の侵入を防止することが重要。見つけ次第、手で抜き取る。
- ② 難防除雑草が侵入した圃場は、土壌処理剤と茎葉処理剤を体系処理する。

(4) 病虫害防除

① ハスモンヨトウ

- ・白変葉が散見され始める時に1回目の防除を行い、その後は発生量考慮して10～15日間隔で防除を行う。
- ・フェロモントラップを設置している地区やほ場においては、8月下旬～9月下旬にフェロモンによる誘殺数が増加するとは場内の白変葉も増加する傾向がある。従って、フェロモントラップの誘殺数が急増した時に、ほ場での白変葉やハスモンヨトウの発生状況を調査して防除要否を判断する。
- ・ハスモンヨトウは1回目の適期防除を行っても、その後の追加防除はその年の気象条件やほ場によって異なる。特に、夏期が高温で経過し、大豆の生育が良好な年は、大豆白変葉の観察やフェロモントラップ調査をこまめに行い、防除が必要と判断された場合は、早急に追加防除を行う。
- ・農薬が茎葉内部及び着莢部に十分到達するように散布する。
- ・地上散布において展着剤としてササラを加用することで、調整時の泡立ちが抑えられるとともに、湿展性が向上する。



②【オオタバコガ・ウワバ類】

- ・気象予報では高温少雨が予測され、ハスモンヨトウと同様に、多発生の条件となっている。
- ・葉に大きな穴が開いた株が目立ち、周辺に青虫がいる場合は、オオタバコガによる食害の可能性が高くウワバ類やシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。

令和8年産 作物作付期間気象図 アメダス観測値(白石)

